

「儀礼環境の伝統と変容～婚礼におけるお色直しについて～」

○ 荒井三津子 平松幸三 横川公子
(武庫川女大)

<目的> 白無垢から色ものへの衣装替えだったお色直しは、新しい人生の始まりを意味し、通過儀礼において大きな役割を果たすと考えられてきた。ところが、明治時代の洋装化の普及と神前結婚式の提案を機に、婚礼は簡素化し始め、昭和30年代からは、産業に組み込まれて急速に成長した。この動きと並行して、伝統的なものとは異なる新しいお色直しが完成した。この変容のプロセスについて具体的にあとづけることによって、お色直しの文化的背景と現代の披露宴における意味を考察する。また、豪華な衣装に託される女性の感受性や思想についても検討したい。

<方法> 歴史的な展開に関しては、主に文献にあたり、現代の情報には、ほかに結婚式業に関する各種資料、および聞き書きを中心に検討した。

<結果> ①お色直しは、披露宴内の「新しい儀式」と「本当の宴」の<けじめ>の演出として機能している。②お色直しのために入退場を繰り返し、会場内を練り歩くことは、衣装が婚姻の承認を周囲から得る効果的な<装置>であることを示唆する。③昨今の過剰な「新お色直し」は、伝統的なものとは全く異なり、女性の<exhibitionism>の表れであり、また、<他との差異化>を求めて自己演出したいという、女性に内在する衣装による防衛と攻撃性の表現ではないかと推測される。